

ひとりの午後

高田敏子

ひとりの午後

大正5年、東京日本橋に生まれる。旧制跡見女学校卒。昭和40年、合唱組曲の作詞「嫁ぐ娘に」「五つの童画」で、芸術祭奨励賞、42年、詩集「藤」で室生犀星賞を受賞。「野火の会」主宰。現代詩人会員。



高田 敏子
(たかだとしこ)

著書——「月曜日の詩集」
「母と子の詩集・にちよう日」
「砂漠のロバ」「詩をたのしく」
「詩の世界」「娘に伝えた
いこと」ほか

現住所 ㊟160 東京都新宿区
諏訪町127番地

ひとりの午後

昭和四十七年十一月十日発行

定価五八〇円

（二二〇円）

著者 高田 敏子

発行者 錦 茂 男

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 P H P 研究所

京都市南区西九条北ノ内町11

電話（〇七五）（六）四四三二

（郵便番号は六〇一です）

無断転載はご遠慮ください

（落丁、乱丁がありましたらお取りかえさせていただきます）

© TOSHIKO TAKADA 1972

0095-032700-7159

はじめに――さびしさの味――

私たちはみんな、さびしさと不安をかかえて生きているのでしょう。日々を幸福に過ごしている方も「幸福すぎて不安だわ」とおっしゃいます。若い方も「なんだかさびしいわ、不安だわ」とよくいわれます。

昨日久々に会った友人は「夜寝つく前がとてもさびしいの、別にこれといった理由もないのに」といいました。それで私は「朝ぼっかり目を開いたときに変にさびしい」と答え「人間ってみんなさびしいのねえ」といいながらお互いの近況を報告し合い元気を付け合って別れました。

この友人と別れたあと、私は町を歩きながら、さびしさの中にまた落ちこんでゆきました。その気持ちを引き立てるために本屋によってみたり、すぐに必要もない家庭用品を求めてみたり、そうした動作のなかで、あの友人もいまごろ私と同じようなことをしているのではないかと思いました。そして、お互いにさびしいから、あのようにしみじみと話し合えたのだとも気がつきました。そして、次々に考えることは、さびしさの原因ではなく、さびしいという感情

が私たちにもたらしてくれるものについてでした。

さびしいから私たちは愛するという行為や感情を持つのでしょうか。人ばかりではなく、花や樹や、物を愛する、仕事にも心を打ちこむ、私の毎日はさびしさに追われ、さびしさを原動力のようにしてまわっていることが思われました。

これは、自分の心の中のさびしさのためだけではなく、外からのさびしさ、目に映るものにさびしさを感じたときも、私はまた何かをしていることに気づきます。

人がさびしそうなとき、私はその人のためにご馳走を作りだします。長い手紙を書くこともあります。花を飾って部屋を明るくすることもあります。

こうしたことを思うと、絵や音楽や、その他美しいものすべて、さびしさがあって創られ、さびしさを知る心があって生み出されてゆくのだということに思い当たります。

詩を書きはじめたころ「さびしさを大切になさい」とある詩人にいわれたことがあります。

「大切に」とはどういう意味なのか、私ははっきりつかむことが出来ませんでした。いま、その意味がわかったように思います。それは、さびしさを知る心を出発点にして、何かを創りだしてゆくことなのでしょう。

若いころの私は、さびしがりやの自分を持てあまし、さびしいという感情を全く余計なもの、生きる上での邪魔なものと思いこんでいましたが、さびしさこそいちばん人間的なあた

かさに通じることが、いまにしてようやくわかってきました。

これからは年齢的にもいっそう、私はさびしさの深みに入ってゆくことが思われます。それだけに、なおさら、さびしさのよさを自分にいいきかせていかなければなりません。

ここに収めたものは、雑誌『野火』創刊号（昭和四十一年）から「私の詩・私の生活」として連載して来たものを主としてまとめました。読み返すのも恥ずかしいような拙いものですが P H P 出版部のご好意で美しい本にしてくださいただけましたことを光榮に思っております。

編集部の皆様にお世話になり、細かな心遣いをいただきまして、厚くお礼を申し上げます。

昭和四十七年八月

高田敏子

ひとりの午後／目次

ひとりの旅

楡の木

白い穂波

糸車

動かない姿

ロバ

台風の日

壕の中

手のひらだけの愛

さくらんぼ

ポケット

うまとび

雨の日

光る時間

53 46 37 31 24 15 9

88 81 75 68 61

さびしさの味

朝

ぶらんこ

杏の村

冷たい手

ひとりの午後

下町の生まれ

行き交う人びと

新しい年への願い

年賀状の人

春を待って

夾竹桃

秋のこころ

枯れ葉

初冬

つめたい夜

172 169 164 158 151 146 140 133

124 119 113 107 101 95

愛の優しさ

静かに訪れて

八月の若者

母と子

春の日

山と息子

九月

210 204 199 192 186 179

装丁／今井勲・カット／小原稔

ひとりの旅

榆の木

他の樹は みんな
雪にすっぽりとおおわれているのに
彼だけは雪を払って立っている

(いつの間に私はその榆の木を

彼と呼ぶようになったのでしょう)

サングラスなしでは 目が痛い

そんな銀世界の中で

彼だけは私の視線をやわらかく受けとめる

いい肌の色だわと

私は彼を見つめ

堂々と立派な枝ぶりね　と

幹からわかれてひろがる枝の一つ一つ

枝先までをたどってゆく

今朝は吹雪だった

彼の姿は吹雪に閉ざされ

私の小屋も吹雪に閉ざされて

五〇メートルとは離れていない彼との距離が

とても遠いものになっていた

私は朝のコーヒーも飲まなかった

編みものを手にしても目数を間違えてばかりいた

それで私は何をしたか

窓に肘をかけて座って

彼の姿のある辺りを見つめつづけていた

こんなにして私は壕の中から見つめていたことがあった

腕や肩や 私が汗をふいてあげた首すじから背中にかけての形や
それらを 何も見えない暗い空間に描きながら
私の描くその形の中に びたりと重なって
帰ってくる人を待ちつづけていた

吹雪はもう晴れない 私はそのために思った
それで私は眠った
ウイスキーと眠り薬を飲んで

目覚めたのは夜中だった
夜光時計のように窓だけが光っていた
そして 楡の木はそこにあった
雪をきれいに払い落として
肌の色をいっそうつややかにして
私の描く輪郭どおりの姿で

しかしそれは楡の木なのだ 一本の樹木なのだ

「彼」と呼ぶ理由はどこにあるの？

自分の心に問ひかけながら

そんな私の心のすきまの中で

少し泣いた

二月の末、雪に埋もれた妙高の小屋で四日間ほどを過ごした。この間に私がしたことといえば、自分一人のための少しばかりの食事の仕度、食事の後は洗い上げた食器をならべなおしてみたり、椅子の位置を置きかえてみたり、子供のときのままごと遊びとそっくりのことで時間を過ごし、そしてそのあとは、屋根裏の小さな窓の前に座って外ばかりをながめていた。

妙高の斜面にはスキーをする人たちの姿が見える。

雪の深さは三メートルぐらいかしら？ と、私は思いながら、ぐるっととりまくまぶしさに目を細くし、それから妙高の頂の上の真青な空を見、そして結局私の目の休む場所は、窓のすぐ向こうに見える楡の木だった。

息子とはじめてこの土地に来たとき、私の目にまず入ったのがこの楡の木で、堂々と枝を張り、青葉を茂らせている頼もしさに魅せられてしまった。そのおかげで、私としてはとてもぜ

いたくな、経済的にも無謀といえる小屋をこの土地に持つことになった。

東京育ちの私が、子どものころからあこがれていたことは、庭のある家に住みたいということ、その庭には、桜の木と柿の木と、あじさいの花をいっぱい咲かせることだった。その願いは三十年以上も持ちつづけて、戦後になってやっと、落ちついた家の庭に苗から植えたけやきと、柿の木、桜の三本が、いまは狭い庭に緑をそよがせ、花を咲かせ、実を成らしてくれている。でも悲しいかなそれは、大木とまではいかない。折角のびた枝も、電線や電話線にかかる前に切らなければならないから。

私はそして、榆の木とか菩提樹とかの大木にあこがれるようになっていた。

ひとりの時間を欲しがりながら、一人きりになってみるとさびしい。さびしがりやの私は、雪に埋もれた一人暮らしの日々を榆の木ばかりを頼りにして過ごしていた。夜、雪崩の音に目覚めたときも、窓から彼、榆の木の姿を見ることが安らぐのだった。

一つところに落ちつき、止まったままにあることの、なんと安らぎを与えることだろう。そこに行けばいつもその木のあることの安堵感は、私に、子ども時代の母の姿を思い出させる。学校から帰って、茶の間に行けばいつもそこに母がいてくれる。「ただいま」の一言を母に伝えることができ、子どもの心は安らぐ。

でも、そうした母と子のつながりも、時の流れの中で変わってゆく。

大樹の命にくらべて、人の命はほんとうに短い。その短すぎる時間の中で、人は止まることを恐れるようにして暮らし、変わってゆく。

自分の愛する人、自分の子供も、自分が抱きつづけるイメージとは少しずつ違ってゆくのではないだろうか。そして私たちは、その変化の中の変わらない部分を見つけ合いながら、愛を保ち合い、なぐさめあっているように思われる。